

## 第40回レーザーセンシングシンポジウム開催趣意書

第40回レーザーセンシングシンポジウム  
実行委員長 福山大学 香川 直己

レーザーセンシングシンポジウムは、1972年に開催された第1回レーザー・レーダシンポジウムから始まり、第12回からは現在の名称に変更され、今日に至っています。本シンポジウムは国内最大のレーザーレーダ（ライダー）に関する学術会議であり、ライダーを代表とする様々なレーザーセンシングに関わる全国の研究者や技術者の発表と情報交換の場として機能しています。

第1回レーザー・レーダシンポジウム開催に際して、日本のライダー研究の先駆者である稲場文男東北大学教授を会長としてレーザー・レーダ研究会が組織され、シンポジウムの継続的な開催やレーザーセンシング技術の向上と普及に関する活動を進めてきました。また、レーザー・レーダ研究会は、日本で開催された過去3回の国際レーザーレーダ会議（ILRC）（1974年仙台、1994年 仙台、2006年 奈良）の現地実行委員会を構成するなど、国際的な活動にも大いに貢献してきました。2018年からは「レーザーセンシング学会」と改称し、新たに学会としての活動をスタートさせ、2022年2月には「一般社団法人レーザーセンシング学会」として正式に法人登記されました。なお、本年は研究会の発足から50周年にあたり、シンポジウムは通算40回目となります。

レーザーセンシングシンポジウムでは、ライダー、レーザ、レーザ分光、レーザ計測など、幅広いレーザーセンシング技術の開発と応用に関する学術成果や、今後の研究についての提案・展望などが幅広く発表されます。ちなみに、前回は令和3年9月1日-3日に東京大学を本部としてオンラインで開催され、53件の発表がなされました。本年は、第40回の記念すべき大会を、奇しくも築城400年の節目を迎える福山城丸の内にある学校法人福山大学社会連携研究センターを主会場として、3年ぶりに対面で開催することになりました。

第1回目のレーザー・レーダシンポジウムが開催された1970年代初頭はレーザが現れてから年月も浅く、レーザ技術はまだ未熟、また周辺の電子・光学技術も現在に比べればそれこそ隔絶の感があり、「レーザーレーダ」を装置として実現すること自体が大仕事という時代でした。それから50年が経過した今では、レーザーレーダを搭載した衛星が宇宙を飛び、市販の自動車の安全装置、自動運転をはじめ、身近な技術となっています。本シンポジウムは、レーザーセンシングの装置開発、計測・計装技術、データ解析、運用技術など、様々な技術分野の専門家に加え、大気・海洋・気象・環境科学関係の研究者が発表および情報交換を行う場として、重要な役割を担ってきました。今回のシンポジウムでも、急速に発展するレーザを中心とした光センシングに関する幅広い分野の話題を取り上げております。そして、この度の会場になる福山市をはぐくむ瀬戸内海は、その豊かな自然を活かし守る上で、レーザーセンシング技術の活用が期待される地域でもあります。関係各位のご参加を心よりお待ちしております。